木の学び ー植林活動から木材利用へ 生徒の歩みー

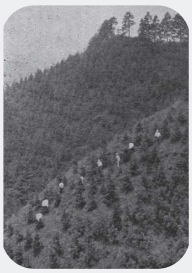
自由学園（東京都東久留米市）は、1921年にジャーナリストの羽仁もと子・吉一夫妻が創立。男子部（中等科・高等科）は1935年に創設された。1学年1クラスの少人数制で、入学した1年間は全員が寮生活を送る。

自由学園の教育理念「生活即教育」に基づき、男子部は開学当初から教室での学習にとどまらない「実学」を重んじてきた。また、学校や寮をひとつの社会と捉えており、1日24時間の生活に生徒が責任を持ち、友と協力しながら主体的に運営する体験を通して、頭も体も心も育まれて「よく生きる人」となれるようにと日々励んでいる。

植林活動や教室の机・椅子作りも男子部独自の「実学」のひとつである。生徒自身が植林地で木を育て、その材を活用する中で、日本・世界の森林の循環にも視野を広げ、持続可能な社会の実現を自分たちの生活と結びつけて考えられたらと願っている。

育てた木で、教室で使う「椅子と机」を作る

1950年植林開始（スギ・ヒノキ）
高校生が代々育てている



木材の搬出

製材所見学

校内で高校２年生が加工

完成した机と椅子

木工所グループの生徒たちが下準備

新入生による机と椅子の製作

生徒の感想

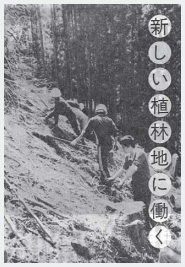
今回の椅子作りで男子部の先輩たち延べ2,700人が68年間で育て上げた名栗のスギを使うことができたのがとても嬉しかった。
- 中等科１年　I君

僕は、絶対に誰にも作れない僕だけのイスを作ることができた。高等科になったら自分も木を育ててみたい。
- 中等科１年　K君

木と木をつなぎ合わせるホゾというものを初めて知った。紙ヤスリで磨いてツルツルになるのは達成感があった。
- 中等科１年　N君

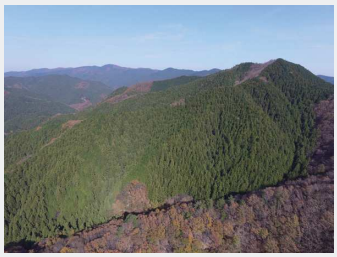
植林・育林活動

左：上名栗8ヘクタールにスギ苗2万本、ヒノキ苗4千本を植える（1950）
右：下草刈りの様子（1958）



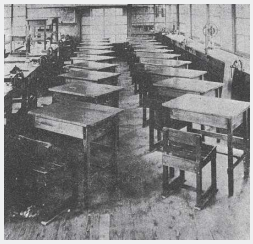
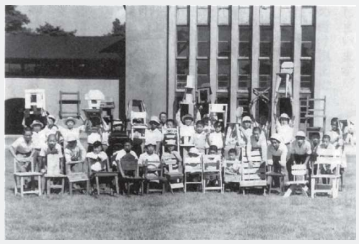
左：植林開始14年目の森（1965）
中：4月季節外れの大雪で倒れた木を運び出す（1969）
右：栃木県黒羽で新たな植林を開始（1983）

左：2代目の小屋の建築風景（1984）
右：道作りの様子（2005）



左：本格的な木材利用開始（2017）
右：名栗植林地全景（2017）

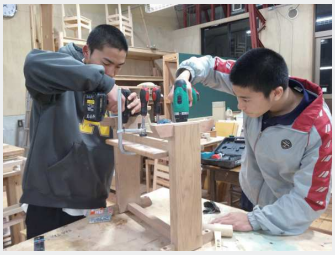
木工活動

左：教室に並べられた完成した机（1941）
右：夏休みの宿題で製作した椅子（1950）

当時の木工所での雲水机作り（1962）
＊禅僧の質素な生活を思わせる着実素朴な机であることから、生徒が名付けた

丈夫な椅子をめざしてデザインが変化
左：教室の椅子（1980）
中：間伐材による試作（1985）
右：生徒と作った食堂の机・ベンチ・サイドテーブル（1992）



左：木工所で椅子の側板に糸ノコ加工を行う（2001年）
右：木工所でサイドテーブルを作り直す（2016）

創立者の想い

男子部の植林・育林活動と木工活動は以下の創立者の想いにより始まりました。

羽仁吉一著『雑司ヶ谷短信』より

「男子部の夢」1935年（昭和10年）- 要約 -
男子部の将来を考えると、50～100町歩位の山の中に山小屋を建てて、そこで生徒に生活をさせたい。山での勉強は労働と研究と静思だ。労働は主として植林をやる。林業の管理や経営もやらせたい。深山大沢そのものから受ける自然の感化に、更に多くの期待をかけたい。夜は炉辺にまといして、静かに聖書を読み、また祈ることを学ぼう。

「雲水机」1940年（昭和15年）- 要約 -
小学校時代から持ち続けてきた詰込勉強の雑物を捨てさせるために、入学後すぐに二人1組になって二脚の机と椅子を作らせることにした。協力することの困難と、困難に克ち得た時の愉快さを経験させることができた。学校は物を覚える所だと思い込んでいた彼らの心に、新しい学問の輪郭がおぼろげながらも分かってきたような気がした。

ウッドデザイン賞 受賞

JAPAN WOOD DESIGN AWARD 2018

植林と机・椅子作りの長年の活動「自由学園男子部80年の木の学び」は、「ウッドデザイン賞2018」ハートフルデザイン部門／コミュニケーション分野にて、奨励賞（審査委員長賞）を受賞した。
　ウッドデザイン賞は、木で暮らしと社会を豊かにするモノ・コトを表彰し、国内外に発信するための顕彰制度。

ウッドデザイン賞公式サイト　http://www.wooddesign.jp